

百日紅（ひゃくじつこう）



夏休みに入り、十日余りが過ぎました。学校からは子供たちの元気な声が聞こえなくなり、少し寂しさを感じます。それでも、朝の学校には蝉の声が響き、強い夏の日差しは変わることなく校庭を照らしています。

私は、できるだけ毎朝、学校の外周を歩き、ごみを拾うことを日課にしています。この日も、たばこの吸い殻や空き缶を拾いながら歩いていると、校庭の片隅で、ひっそりと桃色の花を咲かせる一本の木に目が留まりました。木には古い木製の名札が掛かっています。しかし、文字はすっかり消え、名前を読むことはできませんでした。

調べてみると、その木は「サルスベリ」、漢字では百日紅（ひゃくじつこう）と書くことを知りました。「サルスベリ」という名前は、幹がつるつるとして、「猿も滑るほど滑らかだ」と言われたことに由来すると伝えられています。一方、「百日紅」という名前は、小さな花が次々と咲き、およそ百日もの間、美しい花を咲かせ続けることから付けられたそうです。

ここ散田の地は、「万葉公園」の名が残るように、万葉の時代から自然とともに歩んできた風土に包まれています。万葉集には自然を慈しむ歌が数多く残されていることを改めて知りました。その中の一首です。

春されば まず咲くやどの 梅の花
独り見つや 春日暮らさむ
（『万葉集』 山上憶良）

「春になると、真っ先に庭に咲く梅の花。この美しい花を、ひとり眺めるだけで春の日を過ごすのはもったいない。誰かとこの美しさを分かち合いたい」そんな思いが込められた歌です。

子供たちの元気な声が聞こえない静かな学校で、百日紅を眺めていると…本当は、この花の美しさを子供たちと一緒に眺めたい。「きれいだね」「この花は、サルスベリっていうんだよ!」そんな何気ない一言を交わせる日常こそ、学校にとって何よりの宝物なのだと、改めて感じています。

同じ道を歩いていても、花に目を留める人がいます。一方で、残念ながらごみを捨ててしまう人もいます。景色は同じです。違うのは、その景色を見つめる心です。美しいものを美しいと感じる心。地域を大切に思う心。学校の周りを歩くこの時間は、私にとって自分自身に問いかける時間でもあります。



「今、自分にできることは何だろう」

教育も学校経営も、一度に大きく変えようとするのではなく、小さな実践を積み重ねることが何より大切だと感じています。多くのことをする以前に、その一つの実行を、毎日続けること。当たり前のことを、当たり前続ける。

百日紅を眺めながら… まずは、百実行 より、一実行!!

夏休みが明け、子供たちの笑顔と元気な声が学校に戻ってくる日を、百日紅とともに心待ちにしています。暑さ厳しき折、どうぞお体に気を付けてお過ごしください。

（先日、前任地である三宅島の方々も「校長室の窓」を読んでくださっていると聞きました。とても嬉しい思いです。おやじギャグ、ダジャレ、かけ言葉に終始し、「すべり 去る」ことがないよう、精進します！
今回も最後までお読みいただき、ありがとうございました!!）